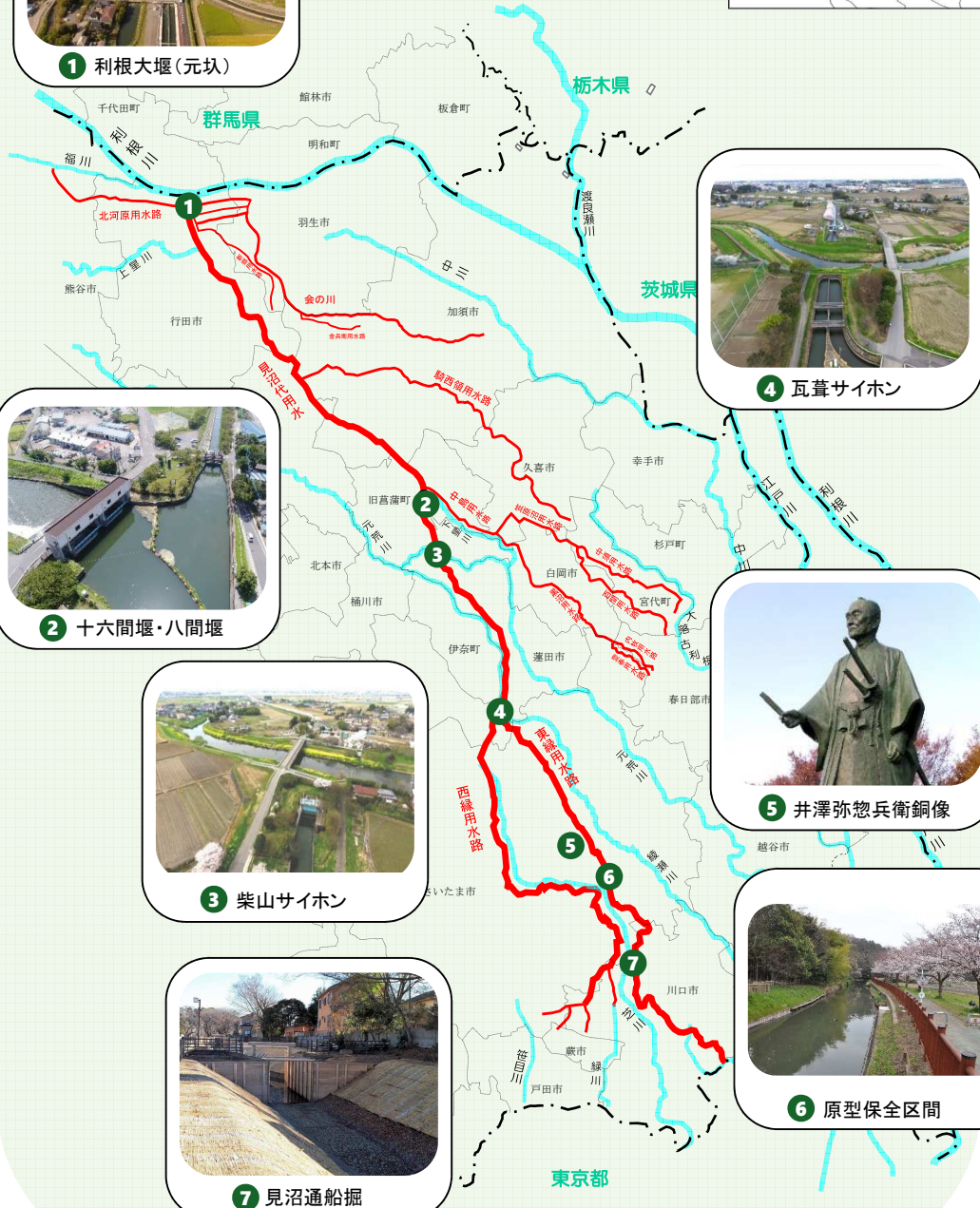
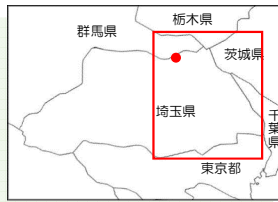


見沼代用水 重要施設MAP



1 利根大堰(元坎)



4 瓦葺サイホン



2 十六間堰・八間堰



5 井澤弥惣兵衛銅像



3 柴山サイホン



6 原型保全区間



7 見沼通船堀

見沼代用水元坎鳥瞰図



原形保全区間



世界かんがい施設遺産
見沼代用水

世界かんがい施設遺産とは

かんがいの歴史・発展を明らかにし、理解醸成を図るとともに、かんがい施設の適切な保全に資するために、歴史的なかんがい施設を国際かんがい排水委員会（ICID）が認定・登録する制度のことです。



瓦葺掛渡井の古図
(埼玉県立歴史と民俗の博物館提供)



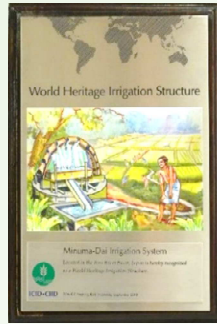
見沼通船堀

世界かんがい施設遺産登録

令和元年9月4日（水）に、インドネシアのバリで開催された「国際かんがい排水委員会（ICID）第70回国際執行理事会」において、「見沼代用水」が「世界かんがい施設遺産」として埼玉県内で初めて登録されました。

和訳

日本の利根川流域の見沼代用水を、当地域において広範な水田開発をもたらした、当時の日本の卓越した最新技術の顕著な事例として、ここにICID世界かんがい施設遺産に登録する。



記念盾



登録証

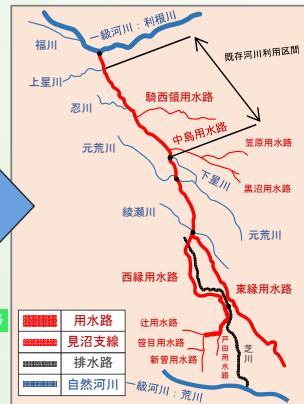
見沼代用水の誕生

18世紀初頭、八代将軍・徳川吉宗は米の増産によって幕府の財政を再建するため、新田開発を奨励した。本地域では、それまで地域の比較的狭い地形を有効に利用した「溜井」を水源としていたが、その灌漑面積は限界に達していた。吉宗に招聘された「紀州流」の優れた土木技術者、井澤弥惣兵衛は、より広域の水源の利用の可能性を検討し、遠方の安定した水源からの導水と既存農地への配水を併せた地域の水条件の抜本的な改善策を考えた。

1728年、弥惣兵衛は約5,000haを灌漑する水源であった見沼溜井を廃止し干拓することで約1,200haの新田とし、代わりの水源を確保するため、約60km離れた利根川から引水する見沼代用水（見沼に「代わる」用水）を築造した。また、用水沿線に支線を分派し、他池沼の新田開発を推進した。国家的プロジェクトとしての見沼代用水の開削は、新田開発と既存田を合わせた約15,000haの水田へ豊富で安定した用水供給を可能とし、当時の食糧増産と財政再建に大きく貢献した。



見沼代用水開削前



見沼代用水開削後

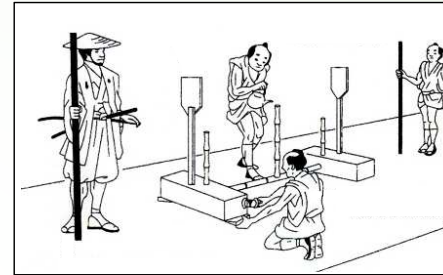


井澤弥惣兵衛 銅像

先進的土木技術の結集

見沼代用水は、卓越した「紀州流」技術により、わずか6ヶ月という驚異的な短期間で完成した。約60kmもの長大水路を自然勾配で導水するために「水盛器」を用いた精度の高い水準測量が行われ、工事は沿線の村単位に分割して一斉に工事を進める「村請け」により行われた。

重要構造物である「元坎」（利根川からの取水口及び樋管）、流量を制御する「八間堰・十六間堰」、河川横断工の「伏越」（元荒川・逆サイホン）や「掛渡井」（綾瀬川・水路橋）等は当時の最先端の技術で設計・施工され、これまでに例を見ない規模の木造構造物であった。また、パナマ運河完成の約180年も前に築造された閘門式運河「通船堀」は、舟運による広域的物流システムを成立させ、江戸の繁栄を支えた。



水盛器



柴山伏越古図 施工図
(埼玉県立歴史と民俗の博物館提供)

時代の要請に応える見沼代用水

見沼代用水は築造から約300年を経過し、コンクリート水路へと姿を変えたが、現在も開削当時と同じ路線で埼玉県東部の大地を潤している。東縁用水路の一部（原型保全区間）では、昔ながらの土水路を利用し、田園風景と調和した水辺空間づくりを行っている。

また、高度な水管理システムによる農業用水の合理化を図り、一部を都市用水へ転用し、水道用水も供給する水の重要なライフラインとして機能している。

水路全線に亘る遊歩道や40kmを超える日本有数の桜並木が整備され、水辺空間、斜面林の景観など都市住民の憩いの場として地域の重要な環境資源となっている。

見沼代用水は2006年に農林水産省の疏水百選に登録された。また、「通船堀」についてもその歴史的・文化的価値が高いことから1982年に国指定史跡として登録されている。



見沼代用水



桜回廊



カヌー体験